

初音カナエルさん インタビュー要約

(不登校理解と支援のヒント)

1. 不登校の捉え方: 問題ではなく「基礎形成の時間」

カナエルさんにとって不登校の期間は、「自分の基礎をつくった時間」でした。
学校に行かないことは特別なことではなく、「そういう状態が普通」だったと語っています。

この経験を通して、

- 自分で考える力
- 好きなことを深める姿勢
が育ち、現在の学びや仕事(教員)にも強くつながっています。

👉 不登校＝遅れ・問題ではなく、「別の成長ルート」と捉える視点が重要です。

2. 不登校の背景: 本人も説明できない理由

不登校のきっかけは「転校」などの可能性はあるものの、本人もはっきりとは覚えていません。

また当時は、

- ADHD特性(宿題ができない等)が理解されず
- 「努力不足」と見なされる環境
がありました。

その結果、

- 怒られたくない
- 宿題を避けたい
という感情が積み重なり、登校が難しくなっていました。

👉 子どもは「行かない理由」を言語化できないことが多い

👉 背景に特性や環境要因がある可能性を前提に見る必要があります

3. 家庭での苦しさ: 最大のストレスは「関係性」

最もつらかったのは「夕食の時間」と語っています。

その背景には、

- 「明日は行けるの？」という問い
- 親の期待に応えようとするプレッシャー
- 家族間の緊張(責任の押し付け合い)がありました。

さらに、

- 本当は元気でも「体調不良を演じる」
- 親の望む姿を演じる
といった状態が続いていました。

👉 不登校の苦しさは「学校外(家庭)」にも大きく存在する

👉 「心配」がプレッシャーになることがある

4. 家庭学習のヒント: 学びは学校外でも成立する

カナエルさんは不登校中も、

- 学習漫画
- 図鑑
- 通信教材
などを通じて学び続けていました。

特徴的なのは、

- 好きなものを繰り返し読む
- 自分の興味から学ぶ
というスタイルです。

この経験から、

「勉強は自分でするもの」という感覚が形成されたと語っています。

👉 家庭学習のポイント

- 「やらせる」より「興味を広げる」
- 繰り返し触れられる環境(本・教材)を整える
- 学びの主導権を子どもに渡す

👉 学校の代替ではなく「別の学びの形」として捉えることが重要

5. 社会とのつながり: 完全に断絶しない工夫

復帰に対する不安が少なかった理由として、

- 母親の英語教室で同級生と接点があったことが挙げられています。

👉 ポイント

- 「学校に行く／行かない」ではなく
 - 「社会との接点があるか」が重要
-

6. 進路観: 不登校は「キャリアの問題」

カナエルさんは、不登校を

「心の問題ではなく、進路の問題」と捉えています。

重要な視点として、

- 学校はあくまで選択肢の一つ
- 目標は「社会的自立」
- 長期的に進路を考えることが重要

と語っています。

また現状の教育について、

- 「なぜ大学に行くのか」を説明できない生徒が多い
- 目的が曖昧なまま進路選択しているという課題も指摘しています。

👉 支援の方向性

- 「学校に戻す」ではなく
 - 「どう生きるか(進路)」を一緒に考える
-

7. 進路支援の具体的ヒント

カナエルさんが実践しているのは、

- 質問を繰り返す
- 抽象的な答えを具体化する
- 好きなことを言語化するという支援です。

👉 重要な問い

- 何が好きか
- 何に価値を感じるか
- どんな生活を送りたいか

👉「正解を与える」のではなく「見つけていく支援」

8. 不登校支援の本質:解決ではなく「発見」

カナエルさんは、不登校支援について

「解決するものではなく、見つけていくもの」

と述べています。

- 子どもの特性
- 興味
- 価値観

を周囲と一緒に見つけていくことが、最終的な支援につながるとしています。

まとめ(実践に向けた要点)

■進路に関して

- 学校復帰をゴールにしない
- 社会的自立という長期視点で考える
- 子どもの価値観・興味を起点にする

■家庭学習に関して

- 好きなことを深める環境を整える
- 自主的な学びを尊重する
- 学習の形にこだわらない

■関わり方

- 親の期待を押し付けすぎない
- 「説明できない状態」を理解する
- 社会とのゆるやかな接点を維持する